第２日目（12 月５日(金)）

◆朝食・集合（～9:00）

※農家民宿宿泊体験をされた方は各農家民宿で朝食を摂りパネルディスカッション会場（「遠野みらい創りカレッジ」）に移動

◆パネルディスカッション（9:00～）

「遠野での企業との連携・交流の現状とこれからの展望について」

遠野において農都交流に関わるみなさんによる、それぞれの立場からの受入れに関する現状報告とこれからの展望をパネルディスカッション手法で意見交換。

（パネリスト）

・石田　久男氏（遠野市産業振興部連携交流課）

・浅沼　亜希子氏（NPO 法人遠野 山・里・暮らしネットワーク）

・樋口　邦史氏（富士ゼロックス(株)営業計画部みらい創り推進グループ長）

（ファシリテーター）

石川　智康氏

◆フィールドワーク、昼食（～13：00）

遠野地域の農園での農業体験や郷土食の昼食、また遠野地区の歴史や自然体験等の地元学を学ぶとともに、農都交流に使用できる交流施設等を見学する。

◆グループワーク（13：00～）

自地域における都市型企業との連携・交流をどう進めるかをテーマに、グループに分かれて意見交換を行う。事前に配布したヒアリングシートを基に自地域を紹介するとともに、農都交流に向けての課題や問題意識を共有していく。

◆グループ発表・講評（～15：00）

グループごとに、グループワークで話し合ったことを全員に紹介。交流の取組や拡大に向けた考え方や問題意識を全員で確認しつつ、自地域での参考とする。

発表後に石川氏及び遠野関係者で講評を行う。

◆閉講式（15：00～）

3）研修会参加者アンケート

◆回答者属性 （計9人）

行政関係者	４人
地域づくり関係社団法人	３人
その他	２人

◆ワークショップの認知経路（複数回答） （人）

農林水産省（地方農政局）からのメール等で知った	1
JOIN（関係者）からの紹介	2
こ以前開催された農都交流セミナーに参加した際に案内があった。DM があった	1
JTB（関係者）からの紹介、JTBのHPで知った	3
その他（地域活性化センターのメールマガジン）	2

（その他）

・地域活性化センターのメールマガジン。
・参加者する友人からのご紹介
・県からの紹介

◆ワークショップへの参加動機・理由体験（複数回答） （人）

「農都交流」に関心があり、その内容や効果等について詳しく知りたかった	**7**
先進地の取組に関心があり、関係者の話を聞いたり実際に体験をしてみたかった	2
これから地域でグリーン・ツーリズムに取り組むので、体制や進め方等の情報やノウハウを得るため	1
現在地域で取り組んでいるグリーン・ツーリズムの活性化や拡大のためのノウハウや情報を得るため	5
その他	1

（その他）

・自身が住みたい地域だったので

◆ワークショップに対する評価 （人）

● とても参考になった	7
● まあ参考になった	2
● 何とも言えない	0
● あまり参考にならなかった	0
● まったく参考にならなかった	0

□理由「とても参考になった」

・地域住民や地元の行政の方との意見交換が大変参考になった。
・農都交流はハードルが高いものだと思っていたが、当市でもできるかもという希望ができた。
今後、検討を進めていきたい。
・当地域では、教育旅行の受入が中心で、新しい取組として企業や大学生の受入れを事務局レベルで検討しており、今回の研修会は今後のステップアップのヒントを頂いた。
・実際の民泊と中間支援組織の話
・農都交流をするにあたってのメリットや課題を知ることができたうえ、事例まで聴くことができ、大変参考になった。
・近い将来、自ら関与する際の、参考や気づきとなったため

□

□　まあ参考になった」

・遠野市の取り組みや実践者との対話は非常に有意義だったが、2 日目のプログラムの満足度が低めだから。
・もっと具体的な踏み込んだ話も聞いてみたかった。

◆「農都交流」を進める上での問題・課題

・「何のために誰がやるのか」を明確にすること。事業が継続するための財源となるリターンを発生させるためには、リスクを負うことが必要であり、そのためには担い手となる人の覚悟が必要だと思う。
・企業が求めるものを、ちゃんと提供できるのか。企業を本気にさせるためには、どうするか。
・連携する企業をどのように探していくのかという点が課題になると思う。
・受入体制の強化（現状の課題として、受入農家数の減少があるため）、企業・大学とのマッチング
・当地域の事務局としては、今後「農都交流」に前向きに取り組むつもりである。現在登録している受入農家が協力してくれるかどうかが心配。また、合宿出来るような宿泊施設等の整備も必要。
・地域のコーディネーターと企業の理解
・一番は農村漁村と都市との接点がなかなかつくれないことではないかと思う。双方とも交流相手の選定基準や選び方がわからず、せっかくやる気があってもないがしろになってしまうケースもあるのではないか。
・費用対効果、会計上のバランスシートのみならず、Social Return of Investment(SROI)についてのテンプレートも是非トライしてほしい。皆様と共に作成してチューンアップしていきたい。

◆「農都交流」について必要な情報（複数回答）　（人）

1大学や企業の受入を希望する農山漁村の情報	1
2 農山漁村との交流を希望する企業・大学等の情報	6
3 企業等の受入体制や組織、人材育成等の情報	4
4 企業等の受入に必要な施設等のハード情報	2
5 企業等の受入に必要なプログラム等のソフト情	3
6 農都交流の先進地や成功事例の方策等の情報	5
7 企業等（農山漁村）への具体的なアプローチ方法	6
8 農都交流に関して助言がもらえる相談相手の情報	4
9 その他	0

◆「農都交流」活動の実施状況（複数回答）　（人）

1近隣や都市部の小中高校の受入（日帰り学習）	7
2 近隣や都市部の小中高校の受入（宿泊学習）	6
3 味覚狩りや収穫体験による家族やグループの受入	1
4 レジャーや社員旅行等での企業、大学等の単発受入	1
5 合宿や研修等による企業、大学等の継続的な受入	2
6 訪日外国人旅行者（団体）の受入	3
7 訪日外国人旅行者（個人やグループ）の受入	0
8 その他	0
X 受入は全く行っていない	0

※無回答2人

◆「農都交流」活動の今後の実施意向（複数回答）　（人）

1近隣や都市部の小中高校の受入（日帰り学習）	3
2 近隣や都市部の小中高校の受入（宿泊学習）	4
3 味覚狩りや収穫体験による家族やグループの受入	1
4 レジャーや社員旅行等での企業、大学等の単発受入	1
5 合宿や研修等による企業、大学等の継続的な受入	7
6 訪日外国人旅行者（団体）の受入	3
7 訪日外国人旅行者（個人やグループ）の受入	1
8 その他	0

※無回答2人

③大分県宇佐市安心院町での実施

1）研修会実施概要

（実施日時）　平成２７年２月１９日（木）

（参加者）　男性８人　女性２人　（計１０人）

性・年代	居住地	職業
①　男性	大分県別府市	地域活性化活動団体（次長）
②　女性	大分県別府市	地域活性化活動団体（係長）
③　男性	大分県大分市	企業 旅行業（支店長）
④　男性	大分県湯布院市	企業 旅行業（代表取締役）
⑤　男性	大分県湯布院市	行政職員
⑥　男性	福岡県大野城市	NPO（支店長）
⑦　男性		地域活性化活動団体
⑧　男性		地域活性化活動団体
⑨　女性		地域活性化活動団体
⑩　男性		地域活性化活動団体

（日程）

２月 19 日	・移動（集合） ・開講式 ・セミナー①、セミナー②、セミナー③ ・座談会 ・交流会

２）研修会記録

第１日目（２月 19 日(木)）

◆受付開始(13;15～)

◆開講式（13：30～）

◆セミナー①(13:30～)

「農都交流プロジェクト：都市型企業のニーズとはなにか」

（講師）　石川　智康氏

（一般社団法人移住･交流推進機構参事、農都交流プロジェクトプロデューサー）

◆セミナー②(15:00～)

「安心院での中間支援組織の役割について」

（講師）　宮田　静一 氏

（NPO 法人安心院グリーン・ツーリズム研究会　会長）

◆セミナー③(16:10～)

「企業の研修ニーズについて」

（講師）　冨山　智香子 氏

（株式会社 JTB コーポレートセールス営業推進本部　研修担当）

◆座談会（参加者意見交換）(17：00～)

宇佐市の農都交流(企業との連携・交流)の現状について、宇佐市のグリーン・ツーリズム担当者から報告を行い、それを踏まえながら参加者全員で農都交流の進め方や取組体制等について意見交換を行う。

（発表者）　〆野　勝教 氏　（宇佐市安心院支所産業建設課 ＧＴ推進係 係長）

◆交流会（18：30～20：30）　※希望者のみ

宇佐市の関係者やグリーン・ツーリズム研究会ののみなさん等を交えての交流会。
地元食材を使った郷土料理を楽しむ。

3）研修会参加者アンケート

◆回答者属性 （計12人） ※オブザーバー参加の 2 名分を含む

所　属	
グリーン・ツーリズム研究会等関係者	8人
地域づくり関係団体・組織	3人
旅行会社（企業）	1 人

◆ワークショップの認知経路（複数回答） （人）

農林水産省（地方農政局）からのメール等で知った	4
JOIN（関係者）からの紹介	2
こ以前開催された農都交流セミナーに参加した際に案内があった。DM があった	1
その他（地域活性化センターのメールマガジン）	5

□その他の意見

- 大分グリーン・ツーリズム会議の中で
- 所属事務局よりの誘い
- 安心院 G/T 実践大学
- 研究会よりの連絡

◆ワークショップへの参加動機・理由体験（複数回答） （人）

「農都交流」に関心があり、その内容や効果等について詳しく知りたかった	8
先進地の取組に関心があり、関係者の話を聞いたり実際に体験をしてみたかった	－
これから地域でグリーン・ツーリズムに取り組むので、体制や進め方等の情報やノウハウを得るため	3
現在地域で取り組んでいるグリーン・ツーリズムの活性化や拡大のためのノウハウや情報を得るため	7
その他	1

（その他）

・九州農政局から案内を受けた。

◆ワークショップに対する評価 （人）

● とても参考になった	9
● まあ参考になった	2
● 何とも言えない	1

□理由「とても参考になった」

・今持っている材料を発展させて、企業・学校を受け入れられるかもと、少し自信を持った。
・農都交流を実践するにあたって、イメージが沸いた。研修のニーズははじめて聞いたので参考になった。
・実行者の話はすばらしい。
・JTB による【企業研修ニーズについて】の話が聞け、又我々の地域（当協議会）に導入するにはどのような事前準備をしなければいけないのか、ヒントを得ることが出来た。

□理由「まあ参考になった」

・都市部の企業や組織が田舎の体験を通して、コミュニケーション力向上の一翼になれると気づかされた。
・セミナーの切り口が良かった。課題をふまえてその前を考えた話を聞けたので参考になった。論理と実践が具体的でわかり易く、今後の活動の参考になる。

◆「農都交流」を進める上での問題・課題

・農都間をつなぐ組織（団体）が不足では？お互い必要としている、されている事にまだ気づいていない事が多すぎる。
・営業力が弱い。わからない。
・受け入れ農家を増やすために、楽しさを広める。
・受け入れ農家として自覚を持ち、対人間と向き合い、市 z 線に対話して勉強して、刺激を受けていきたい。
・1.農村社会の老化。2.政治の貧困。
・受け入れ体制整備。“研修”として受け入れるのであれば、ワークショップや体験プログラムなど目的に合ったプランを提案する必要がある。
・中間支援組織の活性化に尽きる。
・具体的なネットワークの構築。
・農山村の本気度と価値観の転換…これが実際難しい。よそ者・他人には見えないものがある現実がある。
・年々「都市側のニーズ」も変化しつつあると思う。従来の単なる「癒やし」を求める志向から、「地域貢献（ボランティア）」に移っているように感じられ、受け入れる側は今までの「家族単位の受け入れ体制」ではなく、農家民泊を基点とした「地域全体の受け入れ体制」を構築する必要があるように思う。
・地域住民の協力体制構築（事務局の存在）
・明確なメリットの提示と享受
・他地域との差別化（強みは何か）
・周辺地域とのコンビネーションによる魅力度アップ

◆「農都交流」について必要な情報（複数回答）　（人）

1大学や企業の受入を希望する農山漁村の情報	4
2 農山漁村との交流を希望する企業・大学等の情報	9
3 企業等の受入体制や組織、人材育成等の情報	3
4 企業等の受入に必要な施設等のハード情報	2
5 企業等の受入に必要なプログラム等のソフト情	3
6 農都交流の先進地や成功事例の方策等の情報	4
7 企業等（農山漁村）への具体的なアプローチ方法	8
8 農都交流に関して助言がもらえる相談相手の情報	4
9 その他	1

※無回答１人

◆「農都交流」活動の実施状況（複数回答）　（人）

1近隣や都市部の小中高校の受入（日帰り学習）	3
2 近隣や都市部の小中高校の受入（宿泊学習）	8
3 味覚狩りや収穫体験による家族やグループの受入	6
4 レジャーや社員旅行等での企業、大学等の単発受入	4
5 合宿や研修等による企業、大学等の継続的な受入	1
6 訪日外国人旅行者（団体）の受入	6
7 訪日外国人旅行者（個人やグループ）の受入	4
8 その他	3
X 受入は全く行っていない	0

※無回答１人

（その他）

- 国内一般人の受け入れ。
- 大学ゼミの研究合宿の受け入れ。
- 大学の日帰り学習。

◆「農都交流」活動の今後の実施意向（複数回答）　（人）

1近隣や都市部の小中高校の受入（日帰り学習）	1
2 近隣や都市部の小中高校の受入（宿泊学習）	4
3 味覚狩りや収穫体験による家族やグループの受入	6
4 レジャーや社員旅行等での企業、大学等の単発受入	6
5 合宿や研修等による企業、大学等の継続的な受入	8
6 訪日外国人旅行者（団体）の受入	7
7 訪日外国人旅行者（個人やグループ）の受入	5

※無回答１人

3. 企業研修等のモデルプログラムの開発及び検証（モニターツアー）の実施

（1）モデルプログラムの開発及び検証（モニターツアー）の実施概要

①モデルプログラムの開発及びモニターツアーの実施候補地の選定

企業・大学等の研修等受入に関しては、すでにグリーン・ツーリズムに取組んでおり、基本的な施設や地域の受入体制もある程度整っている必要がある。また従来の教育受入から一歩進んだ取組を目指そうという意欲のある地域でないと、企業等との継続的な交流・連携関係を構築することは難しい。

また、モデル地区を拡大する観点から、昨年度実施していない地域でトライアルを行うことも求まられる。今年度はこうした観点から各地域の情報収集等を行い、以下の３地域をモデル地区として選定した。

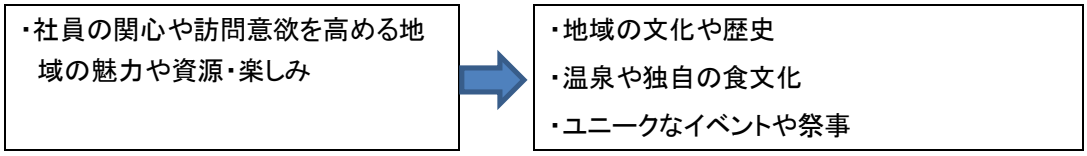
モデル地区	選定理由
１）島根県雲南市	住民主導のグリーン・ツーリズム活動に意欲的に取組んでおり、空き校舎を交流活動に活用する動きなども見られる。
２）栃木県大田原市	首都圏に近い立地を持ち、グリーン・ツーリズムを推進するために、地域で企業法人を設立するなど活発に活動している。
３）静岡県掛川市	首都圏からも中京圏からも近い立地。茶畑が世界農業遺産に選ばれそれを活用した交流人口の拡大と活性化が課題となっている。

②モデルプログラムの開発

モデル地区を選定した後は各地域を訪問し、企業・大学等の研修等を意識した体験・滞在プログラムについて協議を重ねた。学校教育などのグリーン・ツーリズムは、農林漁業体験や自然体験を中心とするプログラムが求められるが、企業・大学等の研修等による交流・連携を進める上では、企業・大学等の多様なニーズや継続的な関係づくりを意識して、多様なプログラムや活動・交流の場を要する必要がある。

【企業・大学等の受入に求められる資源やプログラム】

企業側のニーズ・要望	求められる資源やプログラム等
・都市部ではできない自然や農山漁村ならではの体験型研修	・自然体験プログラム ・農山漁業体験プログラム ・ユニークな農水産物の収穫や栽培体験
・部や課など一定人数が同時に研修が可能な受入施設や設備	・研修や活動に使える移設 ・一定人数が宿泊可能な施設 ・グラウンドや公園などの空間
・社会人として必要な農山漁村への理解やコミュニケーション力を高める機会	・交流会等への住民の参加・協力 ・プログラム実施における住民の参加 ・農山漁村の生活を体験できる民宿や民泊



こうした考え方をモデル地区に提示し、それぞれの地域の資源(施設を含む)等を見直してもらいながら、モデル地区におけるプログラムについて検討・開発を行った。

なお、モニターツアーが企業・大学等に対する地域のアピールの場であることを踏まえて、自治体や地域の協議会、NPO 等に、企業・大学等の受入に関する現状や意欲等を語りかえるセミナー(講演)の時間を盛り込んだ。同様にフィードバックのための意見交換会やアンケートも行った。

こうしたことからそれぞれのモデル地区では、従来のプログラムも交えながら、試行的なプログラムを準備した。主なものは以下のとおりである。こうしたプログラムに基づいて、モニターツアーを実施した。

	島根県雲南市	栃木県大田原市	静岡県掛川市
自然や農山漁村ならではの体験型研修	・林業体験 ・花園作業体験	・牧場やエコファーム訪問	・農業遺産の茶畑作業
一定人数の受入れがが可能な施設や設備	・空き校舎の活用 ・住民センターの利用う	・空き校舎の活用	・ヤマハリゾートとの連携 ・歴史的建築物の利用
農山漁村への理解等を高める機会	・交流会 ・地域文化施設訪問	・交流会 ・農家民宿	・掛川城でのお茶会 ・交流会
訪問意欲を高める魅力や資源・楽しみ	・温泉入浴	・郷土料理作り体験	

（2）各地域での実施状況

①島根県雲南市での実施

1）モニターツアーの実施

（実施日時）　平成２６年１１月１３日（木）～１５日（土）　２泊３日

（参加者）　男性９人　女性３人　（計１２人）

性別	居住地	職業
①男性	島根	金融業（支店長）
②男性	広島	無職
③男性	県外	自営業（事業主）
④男性	島根	金融業（主任）
⑤男性	奈良	無職
⑥男性	島根	副調査役
⑦女性	東京	広告代理店
⑧女性	島根	地元企業
⑨女性		
⑩男性	島根	地域活性化活動団体（課長）
⑪男性	島根	地域活性化活動団体（主任）
⑫男性	島根	地域活性化活動団体（事務局長）

（日程）

11 月 13 日 （１日目）	・移動（集合） ・来雲式・昼食 ・現地視察、地元学 ・交流会 ・さえずりの森（コテージ）に宿泊
11 月 14 日 （２日目）	・散策 ・朝食 ・農林業体験 ・昼食 ・視察 ・交流会 ・入間交流センターに宿泊
11 月 15 日 （３日目）	・朝食 ・レポート作成 ・意見交換 ・離雲式 ・買物

2)モニターツアーの行程

第１日目（11 月 13 日(木)）

◆集合（11：30）　道の駅「たたらば壱番地」に集合→入村式会場へ移動

◆来雲式(入村式)（12：00）

古民家を改装した「山里かふぇ・はしまん(雲南市吉田町)」で行う。入村式後に同所にて昼食。雲南市の郷土料理を体験。

◆セミナー（13：00）

「農都交流プロジェクト：都市型企業のニーズとはなにか」

（講師）　石川　智康氏

（一般社団法人移住･交流推進機構参事、農都交流プロジェクトプロデューサー）

◆現地視察(フィールドワーク)（13：30～16：30）

吉田町内を地元のみなさんの案内で散策。町の歴史などを学ぶ

・本町通り　・吉田ふるさと村　・菅谷たたら山内生活伝承館　等を訪問

◆地元学（16：30）

波多交流センターに会場を移して「波多地区の現状と地域の取組」をテーマに話を聞く。

◆入浴　満壽の湯（17：35～18：25）

交流センター内の温泉施設で入浴

◆交流会（18：30）

住民自身が運営する「さえずりの森」の交流施設を利用して交流会を実施。地元のみなさん、雲南市の関係者とともに、特産品や郷土料理を味わいながら交歓。

(さえずりの森に宿泊)

第２日目（11 月 14 日(金)）

◆散策（7：50）

波多街道の宿場町の古い街並みなどを散策。

◆朝食（8：20）　※朝食後 9:00 に出発

◆農林業体験（9：30～）

２班に分かれて農林業を体験。

（１班）　民谷地区での「林業体験」

・間伐等、地元林業の説明

・材木のカット（チェーンソー）体験、まき割り体験

・寺の裏山で竹の切り出し体験　　等

（２班）入間地区「花園での作業体験」

・花園経営の説明

・花園作業体験

・竹筒炊飯の体験　　等

◆昼食（11：30～12：30）

◆視察（13：30～）

地元企業である木次乳業が運営する食をテーマにした交流施設「食の杜」及び工場を見学。

◆入浴（16：30）

奥出雲湯村温泉で入浴

◆交流会（18：20）

廃校を利用した交流・宿泊施設である入間交流センターにて、雲南市職員や入間地区住民と意見交換会及び交流会を実施。同センターに宿泊。

第３日目（11 月 15 日(土)）

◆朝食（8：00）

◆レポート作成（8：40）

２日間を振り返って、レポートを作成。あわせてアンケートに記入。

◆振り返り（9：10）

レポートを基に意見交換を行う。

◆離雲式（10：：00）

3）モニターツアー参加者アンケート結果

ｉ．モニターツアー参加者（企業、大学等関係者）

◆参加者（企業名）　　（計12人）

業種・分野等	人数
企業	7人
自治体関係者	2人
地域づくり関係団体・組織	3人

2．農山漁村体験ツアーの評価

（人

● とても楽しく満足した　11 ● まあ楽しかった　1	● あまり楽しくなかった　0 ● まったく楽しくなかった　0

□理由「とても楽しく満足」

・自ら体験できること、地元の人と交流できること、これらの実体験から学べることは多いと思う。 ・雲南は地域自主組織ごとに特色ある活動があり、いろんなバリエーションが組めるのではないかと思う。
・都市部の人たちに地方の現状を知ってもらいながら、都会では得ることが出来ない人間らしい心や豊かな自然を感じていただくことによって、アウトプット一辺倒になりがちな都会部の社員の方々にとって、様々な気付きや新しい情報のインプット、そしてクリエイティブな発想へと導きながら、都会にいても、農村部と繋がり続けることにより、心豊かに仕事にあたれることが期待できる、すばらしい企画だと思う。また、農村部においても、外からのお客様との接点が持て、やりがいや活性化につながると思う。今後、精査して、形になり、そしてこの雲南で実施できることを願っている。
・地域の中に外の目を持ち込むことを具体的には着手できていないが、関心、素地のある地域のまさにスタート地点に立ち会うことができたこと。少なくとも、直接関わっていただいた地域の方々には、都市部との継続的交流を進めることにマイナスではない印象を持っていただけたと思われること。
・農都交流の意義や目的について、改めて理解を深めることができた。農都交流は地域活性化は勿論のこと、企業の研修の場（特に都市部）としても相応の効果が見込まれ、双方にとってWIN-WINな取組になると感じた。
・自身が自社の計画等を考えるときに、人口減少・高齢化というのは大きなテーマであり、これは簡単には抗うことが出来ない流れであると考えていた。しかし、今回のモニターツアーを通して、そういった環境の中でも危機感を持ち、対策をとっている方々がいることを知ることができてとてもよかった。もちろん大きな流れに逆らうということは簡単ではないと思われるものの、行政や学校関係の協力のもと、良化させていくことへの可能性を感じた。
・自然の中での人との関わり、人の温かさを感じ、非常に幸福感を持てた。
・恥ずかしながら事前に何も調べないで参加したので、大自然、人の温かさ、全てがとても新鮮でした。もっと長期間過ごせば、さらなる発見があるのではないかと思い、期待も含めて「１：とても満足した」を選んだ。
・一緒に視察することで、都市部から来られた方が雲南市をどのように感じられたかがわ

かり、勉強になった。
・島根県雲南市の自主組織の素晴らしさがあったからこそ、このツアーが充実したのではないか。

□理由「まあ満足」

・だいたいのことは聞いたことがあって驚かなかったが、私にもできることがあると思った。日本語があまりできなくても、仕事と外国人を雲南に引き寄せることができる。自分なりに雲南に貢献していきたい。そのためにもこうやって雲南のことをたくさん勉強して伝えなければならないと思う。

◆「農都交流」（農山漁村での企業や学校等との交流活動・体験活動）に対する評価　（人）

とても良いことなので積極的に進めるべきだ	10	あまり良いとは思えない	1
良いことなのでそういう機会が増えるとよい	0*	まったく良いとは思えない	0

□理由「とても良いことなので積極的に進めるべき」

・地元にとってファンづくり、誇りづくりになり、外貨も稼げるから。企業にとって社内コミュニケーションづくり、モチベーションアップ、アイデアの創出につながる。また、田舎で生きる人のたくましさを知ることで、今後の生活への考え方が変わる。
・モニターツアーの中でも感想として述べたが、積極的に進めていただきたいと思う。
・不景気の中、大都市のライフスタイルを疑うことも増えてきて、人々が別のところから成就を求めている。こういう活動をすることで成就もできますし、物質的安楽だけではなくて経験にも価値があることが分かる。同時に自分の国の状況を知り、農都間を理解しあえることもできる。全国の方々に雲南を見ていただくことが、大変有意義なことだと思う。
・ふるさとを持たない人たちの不安定な部分は、企業等の活動にも影響を与えている可能性が大きく、コミュニケーションの改善、精神的な安定などのために、事後の困難な個別対策ではなく、未然予防という考え方で、広めていくことは共感が得られるように思う。そのためにも、説得力ある成功事例が必要。地域の経済的な利益などを、地元に対してどの程度前面に打ち出すかも要検討。
・農都交流は地域活性化は勿論のこと、企業の研修の場（特に都市部）としても相応の効果が見込まれ、双方にとって WIN-WIN な取り組みになると感じた。
・地元の方達と交流することにより、その地域に入り一緒に地域再生に取り組む、協力したい気持ちになる。
・都心にいると、なかなか農作業の実態を知ることがないのと、協調性を学ぶいい機会だと思うので、積極的に取り入れるべきだと思う。自分が日頃食べているものに、有難みを感じられるようになった。
・都市部にはない良さが農村にはある。また、農村から新しい発見が生み出される可能性もある。
・感じるということの大切さを学べること。

□理由「あまり良いとは思えない」

【良い点】地域のための金融機関の職員としては感じることも多く、交流を取ることは良い。 【悪い点】悪い点というものではないかもしれないが、コストとのバランス次第だと思う。

◆「農都交流」活動の実施状況　（人）

	組織全体で取り組んでいる	支社や部署で取り組んでいる	農山漁村では行っていない	わからない知らない
ア　自然保全・学習や文化継承などの CSR 活動	5	1	3	1
イ　農作業やお祭り支援などのボランティア活動	0	4	4	4
ウ　新入社員や部門別、職種別等の研修・教育	0	2	2	2
エ　産品や環境等を活用する製品や事業の開発	0	2	2	2
オ　味覚狩り、収穫体験等のレジャー（福利厚生）	0	0	0	0
カ　社員（職員）向けの農園としての借り上げ	0	0	0	0
キ　退職者向けの移住や定住の情報提供	0	0	0	0
ク　外国人社員（職員）向けの研修プログラム	0	0	0	0

◆「農都交流」活動の今後の実施意向（複数回答）　（人）

1　自然保全・学習や文化継承などの CSR 活動	7
2　農作業やお祭り支援などのボランティア活動	8
3　新入社員や部門別、職種別等の研修・教育	8
4　産品や環境等を活用する製品や事業の開発	3
5　味覚狩り、収穫体験等のレジャー（福利厚生）	2
6　社員向けの農園としての借り上げ	4
7　社員（職員）向けの農園としての借り上げ	4
8　退職者向けの移住や定住の情報提供	3
9　外国人社員（職員）向けの研修プログラム	3
10　その他	3
X　農山漁村地域で特に何かを行う必要はない	0

（その他）

・自治体が取り組む場合の支援、関心ある企業と自治体のマッチング
・県外の取引先に対する情報発信、研修プログラムの紹介

◆.自社・自組織での今後の実施意向　　（人）

1　積極的に取り入れていくのが良い	8
2　できれば取り入れていくのが良い	1
3　どちらともいえない	2
4　取り入れる必要性はあまり感じない	0
5　取り入れる必要はない	0

□実施したい活動と理由

・プロパー職員研修。・中小企業新入社員合同研修。	部局を横断したアイデアの創出を自然豊かな空間で行う。コミュニケーション能力向上のため。
新入社員や若手社員の交流会／30 歳程度社員の交流会／都会部の社員の研修	他業種の同じ世代の社員が集い、同じプログラムをこなすことで、繋がりを持ちながら、田舎の実情を知り、心や食の豊かさに人間らしい心や、生きる力を得る（リフレッシュ）。また、企業と田舎の繋がりから新しい展開を期待できる。地域の活力になることも期待できる。
研修ができる環境づくり	雲南市としての市内の団体・企業が積極的に様々な研修などを主催できるような環境を作らなければなりません。作っておいて、来るように促していくとお客さんがたくさん来ると思う。
任期終了後、自治体に帰任する職員であり、経験を持ち帰って、自らの団体で実施する。	
弊行県外店舗の取引先に対し、今回の研修プログラムを紹介していく。	弊行の行員向け研修として検討も可能ですが、弊行行員は基本的に地元出身者であるため、効果は限定的と考える。むしろ弊行の店舗ネットワークを活用し、県外店舗（特に大阪・兵庫）の取引先に対し、今回の研修プログラムを紹介していく方が有益と考える。社員の連帯感や一体感の醸成またはコミュニケーション能力の向上は、昨今の企業が人材育成において抱える大きな課題であり、特に都市部の企業においては日頃とは違う環境で価値観や職業が全く異なる人々と触れ合い、対話をすることで上記の課題に対し、一定の気付きを与えることができると思料。
研修等は本部の決定事項であり、支店としては何とも言えない。支店長の権限内においては、積極的に取り組みたい。	
新年度の交流	農業を通して血色力を高めることができる。
チームビルディング研修	疎遠なメンバー同士が、協力、助け合いの大切さを身をもって知ることができる。
受け入れ側として、企業の研修やメンタルヘルスケアとして取り組みたい。	「農」や「地元民」「文化」を企業の課題解決に役立てていければと考えている。

◆「農都交流」を進める上での問題・課題（複数回答）　（人）

農山漁村との交流の意義や目的が分からない	2
農山漁村との交流による企業メリットが分からない	6
現在の研修活動等に問題がなく成果も評価できる	1
農山漁村で行う（できる）プログラムが分からない	4
農村漁村での効果や期待する成果が分からない	5
交流相手となる農山漁村の存在が分からない	4
交流のためのコスト（運賃など）が問題になる	5
交流のための時間や労力がかかることが問題になる	3
支社や部署ごとならば可能だが全社では難しい	1
その他	1

（その他）

・交流相手となる企業が見つかるか。

◆「農都交流」を進める上で必要な情報（複数回答）　（人）

大学や企業の受入を希望する農山漁村の情報	2
企業等に提供できるプログラム等のソフト情報	6
受け入れる農山漁村への具体的なアプローチ方法	2
農都交流の成功事例や効果に関する情報	9
農都交流に関して助言がもらえる相談相手の情報	3
その他	0
特にない	1

9.「農都交流」に地する意見、推進するためのアイデア

その他「農都交流」への期待、想定される効果
・企業ニーズ別にわけたメニューの開発 ・コーディネーター人材、組織づくり ・セールス用フライヤーの作成 ・災害時包括契約（企業×地域自主組織）
・目的と効果、プログラム、コンセプトがどれだけ企業に対して、もしくは参加したい層に対して魅力的かだと思います。意義は大変あると思いますので、後は選択できる地域数（雲南の様に、一見不便そうだけど空港から1時間少しで行けてしまうところ）を増やしつつ、同じ地域の中で幾つかのプログラムがあると良いかと思います。
・毎年行われるとよい。支援・参加したい。

・今回の対象地域のように、伝統的な地縁組織がしっかりしていて、どれを土台に今のニーズをこなしている場合には、安定感、まとまりがある反面、どうしても年長者が仕切る傾向にある。そこに、居住者、時々通う域外のリピーター、若いＵターン者、域外の出身者、外国人などの外の目を持っている人のアクションをどう取り込むかが、一つの課題。地域ごとにやり方が違っていいと思うが、外、外と言って拒否反応を招かず、一方で定住による人口増、高齢者では困難になった地域の役務の肩代わりなどの成果を急がず、花粉症の減感作療法のように異分子を上手に慣らしていくコーディネート機能を持つ人を探すことが大事か。 ・市の若い職員、地域に関心を持つ大学生、ALT、協力隊、外から通ってくる教員、何かで地域に関わりのある企業のメンバーなどの中に、（全部が全部ではないが一定の割合で）そういう素質を持つ人がいると思われるので、芽を摘まず、むしろ唆して、多少の物的応援もしながら、いろいろとさせてみることを総合センター単位、交流センター単位などでやれたらよいと思った。 ・何事もワンパターンに市内を一色に画一化するのはよくない（行政の陥りやすいところ）。まだら模様の状態で、少しずつ白地が塗られていくような取り組みができればよい。大変愉しい3日間で、これから期待も持てる3地区だと感じた。関わったスタッフの方々に感謝。
・2日間、雲南市職員の皆さまを中心に大変お世話になり、感謝申し上げる。
・もっと地元の方と話をする等する時間が増えると良いと思う。例えば、参加者の人数を少なくするとか、地元の方の人数を増やすなどが出来れば、より深く理解をすることが可能であると思う。
・雲南市について、現在まちづくりワークショップを主に商工会を会場として行っているが、それを今日の会場で開催するようにしてはどうか。個人的には、日常の精神的疲れから回復でき、明日への活力が生まれ、非常に良かった。
・非常に有意義な時間を過ごすことができた。今まで農業の世界を見る機会がなく、あまりにも自分の生活との違いに驚いた。また、実は都会の人達もある意味豊かな生活を送っているような気がしました。今後、企業や学校だけでなく、家族単位で受け入れてもいいのではないかと思いました。都心にいると、仕事や学業であまり家族の時間が取れないのが現状で、たとえ一緒にいたとしてもコミュニケーション不足なところがある。農作業を通してコミュニケーションを増やし、また農家の方々の生活を見て、普段の自分の生活と比較するいい機会であると思う。
・協働が必要。よくできている。自治体＋住民＋プログラム開発企業＋旅行会社。 ・連絡の密度（準備、当日他）がよくできている。 ・成功事例は、情報発信する必要もある。（今後）世の中にどんどん出す。 ・（今後）地域の方がやりたいことを、参加者がファシリテートして地域おこし協力隊員や予備軍の方へ。どんどん出す。 ・
・「これまでの競争社会から共創社会へ」農都が交流することによって新たに生まれる価値観をたくさんの方に共有していきたいと思った。地域地域の特性を活かしたストロングポイントを取り入れたプログラムの導入。

②栃木県大田原市での実施

1）モニターツアーの実施

（実施日時）　平成２７年１月２２日（木）～２３日（土）　２日間

（参加者）　男性８人　女性２人　（計１０人）

性・年代	居住地	職業
①　男性	茨城県土浦市	企業 研修ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄ（部長）
②　女性	茨城県土浦市	企業 研修ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾄ（取締役）
③　女性	東京都武蔵野市	企業 イベント業　（ﾏﾈｰｼﾞｬｰ）
④　女性	東京都練馬区	企業 サービス業（取締役）
⑤　女性	東京都新宿区	企業 出版業（ｱｼｽﾀﾝﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ）
⑥　男性	東京都渋谷区	企業 ｻｰﾋﾞｽﾃﾞｻﾞｲﾝ ｺﾝｻﾙﾃｨﾝｸﾞ（代表取締役）
⑦　男性	東京都港区	企業　人材派遣業（課長）
⑧　女性	東京都千代田	公益社団法人
⑨　男性	東京都中央区	企業 人材派遣業
⑩　女性	東京都中央区	企業 人材派遣業（ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｻｰ）

（日程）

１月 22 日 （１日目）	・移動（集合） ・昼食 ・収穫体験 ・農都交流セミナー ・フィールドワーク ・交流会 ・農家民宿宿泊体験
１月 23 日 （２日目）	・朝食 ・各農家民宿にて体験 ・昼食 ・ワークショップと振り返り ・解散

2）モニターツアーの行程

第１日目（１月 22 日(木)）

◆集合（JR 那須塩原駅）（11：22）

改札口周辺に集まり受付。受付後バスにて移動。

◆昼食と収穫体験（12：00～13：30）

食肉牛の肥育と出荷を行っている前田牧場を訪問。大田原牛の昼食の後、牛糞や敷き藁等を利用した良質のたい肥づくりの取組や、食肉加工品や飲食施設など６次化の取組を見学。

◆農都交流セミナー（14：00～）　旧須賀川小学校に移動

①フィールドワーク（周辺散策）

廃校となった旧須賀川小学校周辺（須賀川地区）を散策して、この地区の状況を視察する。豊かな自然が残る一方で、耕作放棄地の増加などの変化を地元の長谷川氏より解説を受ける。

②セミナー

１）「農都交流プロジェクト：都市型企業のニーズとはなにか」

（講師）　石川　智康氏

（一般社団法人移住・交流推進機構参事、農都交流プロジェクトプロデューサー）

2）大田原市の農都交流（企業との連携・交流）の現状について

（講師）　藤井　大介氏

（株式会社大田原ツーリズム　代表）

◆交流会（18：00～20：00 頃）

大田原産の野菜や自家栽培の無農薬農産物にこだわっているカフェレストラン「カボシャール」にて、グリーン・ツーリズム関係者や農家民宿のみなさんと意見交換及び交流会を実施。

◆農家民宿宿泊体験（交流会後に農家民宿に分宿）

第２日目（１月 23 日(金)）

◆朝食（共同調理体験）

農家民宿にて朝食の準備を手伝う。

◆各民宿での体験プログラム（～11：00）

朝食後に各民宿にて、農林業体験、郷土料理づくり体験、周辺散策などの体験プログラムを実施。

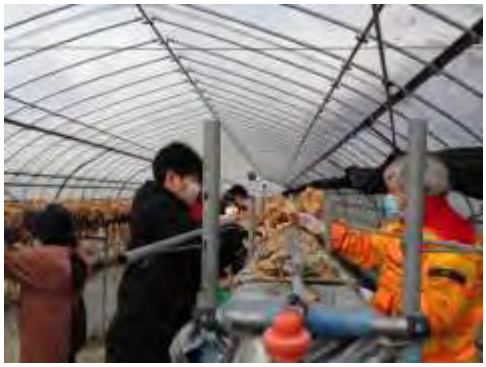
◆昼食（11：30～13：00）

那須野が原ファームにて、エコファームの取組を視察し、その後昼食。

◆ワークショップと振り返り（13：40～15：00）

旧須賀川小学校に移動。２日間を振り返るワークショップ「大田原での企業との連携についての意見交換」を行う。あわせてアンケートへの記入を行う。

◆解散（16：00 頃）



3）モニターツアー参加者アンケート結果

ｉ．モニターツアー参加者（企業、大学等関係者）

◆参加者属性　　（計10人）

業種・分野等	人数
企業関係者	９人
ＮＰＯ法人	１人

2. 農山漁村体験ツアーの評価　　（人）

● とても楽しく満足した　8	● あまり楽しくなかった　0
● まあ楽しかった　2	● まったく楽しくなかった　0

□理由「とても楽しく満足」

・農家とのつながりを持たない人々にとって、貴重な時間がえられるのではないか。農家は、食べるものの本物（本質）を知っている。日本が高度経済成長するに伴い、公害が叫ばれ、環境に対する配慮が欠けた時代を経ての現代ですから、農薬に関する知識や経験も多くなり、都会人の農業に対する考え方が浅はかであることは、農都交流を通じて感じてもらえると思う。農作業を体験した種屋の取組は、興味の有る話であった。生命、環境に対する様々かつ有用なことが学べると感じた。
・初めて参加したこともあるが、「体験」の内容がよかったこと、その体験もあまり敷居の高いものではなく、取り組みやすかったこと、観光の要素も入っていたこと、など。
・あっという間に時間が過ぎていくほど、充実していたと思う。座学も含め、様々なバラエティ豊かな内容で大満足。
・とれたて野菜のおいしさを再確認。農家民宿はとても良いと思う。農家の方々の力強さを身近に感じることができた。
・農家の皆さんのあたたかさにふれ、心温まる体験ができた一方、農山村地域の現状を直に見て考えることができた。
・観光で訪れることのない大田原という土地の魅力を知ることが出来たことと、貴重な農村の方々との交流を通して現状（良い所とそうでない所）を再認識できた。
・様々な大田原の側面をみることができて、また今度はより時間を多くとって参加したいと思った。また、自分の次なる活動の場を早く固めて、今回の機会をできるだけ活かしたい。農家の方と触れ合うなかで、夫婦、親子同士が（地域の方でお姉様）支えあって、協力しあって生活しているのを肌で感じた。お互いが無理のないやり方を提案しつつ、相手を思いやる姿がとてもあたたかかった。愛のある家族だと感動した。
・農泊受け入れ家庭のもてなし、温かさに触れ、農業の現状（生の声）が聞けた。

□理由「まあ満足」

・全体的にはスムーズにまとまっているが、どうしても終わりの方になると時間がタイトになり、余裕がなくなるため、一番大切な最後のシメがないがしろにされてしまっている。
・参加者間のコミュニケーションをもう少しとれるような仕掛けがあればよかった。

3.「農都交流」(農山漁村での企業や学校等との交流活動・体験活動)に対する評価　　(人)

とても良いことなので積極的に進めるべきだ	10	あまり良いとは思えない	0
良いことなのでそういう機会が増えるとよい	1*	まったく良いとは思えない	0

*「とても良いことなので積極的に進めるべきだ」と複数回答

□理由

・笑い話だが、「鰤や鮭が切り身で泳いでいる」と言う子どもたちが実際に居る。と言う話は有名だが、農業においてもどの様に結実し、どの様に収穫しているのか？成長はどうなのか？など、普段何気なく食べている食材について、本来は家庭教育の範囲であるはずが、家庭教育の欠如により、学問的な知識は年々向上しているにもかかわらず、生きるチカラが失われつつあると感じる。本件とは違うが、過日、大学生を農作業に連れて行った際、収穫した梨をむくことが出来ずに右往左往していた大学生がおり、農家とのかかわり合いは生きるチカラを授けてくれる大事な経験であると考えられる。
・日常生活の中ではそれぞれの立場の人たちに気づきや発見が無い。交流することによって双方に、「非日常」が生まれて、気付きや発見ができることに加え、感動や心のふれあいなどが生まれてくると思うから。
・農村と都市の交流だけでなく、すべての人がより深く知り合える気がする。
・農山漁村の生活体験は“生きる”ことをあらたに考えさせられる、全く違う“世界”を教えてもらい、体感できる。
・地方創生が叫ばれる中、都市と地方が互いに理解しあえる関係づくりが、今後ますます重要になると思われるため。
・普段考えられない発送や気づきが体験から得られそう。
・都市部の仕事や生活では感じたり触れることの出来ない大切なものがあり、今を見つめ直すよい機会になると思う。
・体験、地域の人との触れ合いでコミュニケーション力がアップするので。
・過疎地域に人が行くことによって、食の大事さや日本の文化、自然を見直す機会になり、とても良いことだと思う。その一方で、それを支援する中間支援組織、さらにそれをまとめる団体や行政、サイト等の連携がとてもカギになると感じた。中間支援組織もそれをまとめる側がまだまだ発展途上の部分があり、大変そうだが、とてもやりがいのある仕事だと感じた。

◆「農都交流」活動の実施状況　（人）

	組織全体で取り組んでいる	支社や部署で取り組んでいる	農山漁村では行っていない	わからない・知らない
ア　自然保全・学習や文化継承などの CSR 活動	1	1	6	2
イ　農作業やお祭り支援などのボランティア活動	1	1	6	2
ウ　新入社員や部門別、職種別等の研修・教育	2	0	7	1
エ　産品や環境等を活用する製品や事業の開発	2	1	4	3
オ　味覚狩り、収穫体験等のレジャー（福利厚生）	3	0	5	2
カ　社員（職員）向けの農園としての借り上げ	1	0	6	3
キ　退職者向けの移住や定住の情報提供	1	0	6	3
ク　外国人社員（職員）向けの研修プログラム	1	0	8	1

◆「農都交流」活動の今後の実施意向（複数回答）　（人）

ア　自然保全・学習や文化継承などの CSR 活動	5
イ　農作業やお祭り支援などのボランティア活動	4
ウ　新入社員や部門別、職種別等の研修・教育	4
エ　産品や環境等を活用する製品や事業の開発	5
オ　味覚狩り、収穫体験等のレジャー（福利厚生）	4
カ　社員（職員）向けの農園としての借り上げ	3
キ　退職者向けの移住や定住の情報提供	0
ク　外国人社員（職員）向けの研修プログラム	2
その他	1

（その他）

・複数の従業員を有している会社ではなく、逆にこのような取組を売り出す。地域コミュニケーション促進企業として、このような取組を理解し、自分自身が農都をつなぐ立場にあると感じた。

◆「農都交流」を進める上での問題・課題（複数回答）　（人）

・農山漁村との交流の意義や目的が分からない	1
・農山漁村との交流による企業メリットが分からない	2
・現在の研修活動等に問題がなく成果も評価できる	0
・農山漁村で行う（できる）プログラムが分からない	2
・農村漁村での効果や期待する成果が分からない	2
・交流相手となる農山漁村の存在が分からない	3
・交流のためのコスト（運賃など）が問題になる	3
・交流のための時間や労力がかかることが問題になる	3
・支社や部署ごとならば可能だが全社では難しい	1
・その他	3

（その他）

・研修後のフォロー。
・窓口がわかりにくい。
・初日のセミナーで講師が説明したとおり、上記設問については効果が売り上げに直接結びつかず、メリットを経営者が理解することはなかなか難しい側面があると考えられるが、昔、会社員であった時の経験から推測するに、自分自身の売り上げを社内セールスで達成する社員が居り、社内交流が進むことで自社の製品の新たな販路拡大につながることは確かにある。この様な状況を現在の経営者は把握出来ていないし、同様に社員自身が理解することはない（できない）。つまり、これらの事業を推進することにより、社内活性化が進むことで数年後には必ず売り上げや利益と言う形で成果が出ることを理解させる方向性を作り出すことが大事だと考えられる。

◆「農都交流」を進める上で必要な情報（複数回答）　（人）

・交流（受入）を希望している農山漁村の情報	5
・農山漁村での研修活動のプログラムの事例	3
・研修以外の農山漁村でのプログラムの事例	4
・農山漁村との交流による具体的な効果・メリット	3
・農山漁村との交流を活用した企業広報の事例	2
・農山漁村との交流・連携に関する相談や情報の窓口	2
・その他	0

（その他）

・コスト
・複数の従業員を有している会社ではなく、逆にこのような取組を売り出す。地域コミュニケーション促進企業として、このような取組を理解し、農都をつなぐ立場にあると自分自身で感じた。

◆「農都交流」に地する意見、推進するためのアイデア

・大田原市の取り組みとしての先見性・先導性について大変興味があり、大田原市が出資して作った株式会社大田原ツーリズムがどの様な方向性に進むのか注意深く見せて頂きたいと思っている。私自身の仕事のフィールドで考えれば、地方の農山林は環境教育において宝の山であり、農水省は一時的に再生可能エネルギーに対して撤退したが、これらツアーを通じて再生可能エネルギーに対する認識を参加者一人ひとりが理解度をあげることで、さらなる収益事業へと発展出来る可能性は高いと考えられるし、環境教育を通じ新たなメニューを作り出すことは可能だと思う。栃木県北部地域は、自動車や電機メーカーなどの企業城下町であり、これら企業に納品しているベンチャー企業も少なくない。自動車や医療機器などは今後の社会生活において非常に重要な産業であり、これら企業との連携は大きな成果につながると考えられる。
・農家の方々との話の中で、ある企業が撤退したことをお聞きし、その跡地活用や撤退企業に関連した何かはすぐに生み出せるであろうし、企業が撤退したことでさらなるビジネスチャンスが大田原にあることも理解すべきである。いずれも本業での協業ではなく、農業の中に光を見つけ出す必要があるのは必然である。
・いずれにしても、農家自身が自信を持って、勇気を持って取り組んでいる現状については大きな敬意を表するとともに、これからの大田原ツーリズムについては大きな地域希望であると今回のツアーを通じ感じることができた。
・最後に、初日夕刻の交流会で市役所職員にお話をうかがわせて頂いたが、役所がこれからもどんどん変わる必要がある。大田原ツーリズムを成功させるも失敗するのも役所次第である現状をいかに打破できるかは、今後の課題であると思う。
・良いプログラムだと思う。積極的に取り入れたい。地域、企業など。イベントの企画の一つ、交流事業の一つとしても大変有意義である。地元の観光の目玉になりうると思う。 ・そのほか、自分自身も参加してみたいとおもったので、積極的に参加のチャンスを増やし、個人レベルでの PR もしてみたいと思う。
・たいへん有意義な1泊2日ツアーであった。お世話になり感謝する。この体験をぜひ多くの人に口コミ PR して、広めていきたい。
・大田原のグリーン・ツーリズムの情報拡散、認知度アップが必要。 ・取組の PR（今まで知らなかったので）。参加して、とても楽しく過ごすことができ、良い体験が出来た。是非プロジェクトの成功を願っている。都内で家庭菜園の愛好家のグループに、民泊をアプローチしてはどうか。
・定着するまでに時間と手間がかかる様だが、地方創生に大きく寄与する内容であり、全国的に横展開できるモデルだと思う。JTB に限らず、多くの事業者で取り組んでもらいたい。
・「農都交流」という非常によいプラットフォームを活用して、他地域でも展開していく活動に参画したい。福島県の地元で考えたい。
・食料自給率の低い日本において、それを支える農村の実情を知ることは重要であり、農都交流を通じて農村に光があたり、農村の方々がモチベーションを持って取り組める仕組みづくりを推進すべきと感じたし、交流の活動を広く知らしめることで、若者の中で興味を持つ者も出てくるのではないかと思う。今後は取り組みを更に広くアピールすることが重要と感じた。

・今回はコストについての話が無かった。交通費は調べれば分かるが、農泊に関する費用（一人一泊いくらか？）無料で泊まる訳にいかないし、受け入れ先も我々に食事、飲み物を提供しているので、無料では済まない。いくら受け入れ家庭は得ているのか？ちなみに私が昨夏に経験した島の民泊は一人一泊 5,000 円でした（島の観光協会の HP には一人一泊 6,000 円と書かれていたが…）
・アンケートは１日ごとに頂けると、バタつかず、新鮮なまま書くことができます。

ⅱ.ツアー受入関係者

◆モニターツアーの受入参加者のうちアンケート回答者 （計８人）

【今回のモニターツアーへの協力･関与状況】

分野	人数	職業・所属	協力・関与内容
農業	4人	農業	食事の提供
		農業	農作業の指導、食事の提供、交流会の参加。
		農業	食事の提供。交流会に参加。前日（16 日）雨の為、農作業が出来なかったので、ハウスのいちごの枯葉取りを1時間 30 分位実施。
		牧場	家の障子張り、草むしり、野菜の収穫体験とその野菜で BBQ やしゃぶしゃぶ。
観光協会	3人	観光協会	交流会に参加
		観光協会	ワークショップに参加
		観光協会	最ワークショップを見学
企業（観光）	1人		全体のコーディネート
計	８人		

◆モニターツアーで他地域の人を受け入れた感想

◇事前準備について

・大変だった　１人
・たいしたことはなかった　３人
・何とも言えない　１人
・特に事前準備はしていない　１人
・無回答　２人

◇実際の受け入れ時（作業の指導、食事提供等）について

・大変だった　１人
・たいしたことはなかった　４人
・何とも言えない　０人
・特に事前準備はしていない　１人
・無回答　２人

◇交流会について

・とても楽しかった　５人
・まあ楽しかった　１人
・何とも言えない　１人
・無回答　１人
・あまり楽しくなかった　０人
・全く楽しくなかった　０人

◆今後の受入活動への参加意向

- ぜひ参加したい　４人
- 参加してもよい　３人
- 何とも言えない　１人

◆モニターツアーの受入で印象に残っていること、良かったこと

農業	タイトな時間内に、どうやって地域の良さを表現できるメニューを入れるか。大人数に出すか。
農業	農業だけでは知り合えない方々と楽しい会話ができたこと。農作業を手伝って頂いて、とても助かった。
農業	若い人達が活躍している。私が作った料理なんでもたくさん食べてくれた。昔の話や自分のことを良く聞いてくれた。また、子どもたちが大きくなったら田舎がないので、また来てほしい。
農業	いつもの自分の生活が都会の方にとっては素晴らしい環境になること。物事をいろんな角度から見る勉強になった。そして、たった一晩の宿のためにお土産を持参してくださる優しさに感激。自分もそうしたいと思う。
観光協会	ワークショップのみ参加でしたが、都市部の方々の意見を聞く事が出来て良かった。
観光協会	内にいると分からない点や気付かない点が、外の人により教えられた。
企業（観光）	ものすごく食事を評価していただき、おいしく食べていただいた点。農泊から戻ってきた参加者の方々が、農家さんと楽しく打ち解けていた点。
農業	タイトな時間内に、どうやって地域の良さを表現できるメニューを入れるか。大人数に出すか。
農業	農業だけでは知り合えない方々と楽しい会話ができたこと。農作業を手伝って頂いて、とても助かった。
農業	若い人達が活躍している。私が作った料理なんでもたくさん食べてくれた。昔の話を良く聞いてくれた。、自分の考えている事など、子どもの事なども話ができた。子供たちは大きくなったら田舎がないので、また来てほしい。
農業	いつもの自分の生活が都会の方にとっては素晴らしい環境になること。物事をいろんな角度から見る勉強になりました。そして、たった一晩の宿のためにお土産を持参してくださる優しさに感激。自分もそうしたいと思う。

◆「農都交流」（都会の企業・大学等との交流・連携）を進める上での問題・課題

農業	どう魅力的にPRするか。
農業	農作業体験の折など、トイレやシャワー、お風呂など（温泉施設）、利用、整備が必要だと思う。家に来る中学生や高校生など、やはり心配事はその部分かと思う。受入家庭も家族としてのもてなすが、負担になるところもあると思う。トイレやシャワールームについての補助事業などがあればよい。
農業	価格の問題があると思った。安いにこしたことはないと思うが、仕事を持ちながらの場合は、ほぼボランティアになってしまう。価格が高いと求められるものも高くなり、難しいと感じる。
観光協会	お互いが求める物を一致させる事。
企業（観光）	大田原市の良い所、他に無い所を地元民と発見・開発する場を設ける事ができたらよい。
農業	・企業が求めているニーズの把握 ・地域と企業様をどうマッチング出来ると最大限の効果が出るか。 ・大田原で活動を行う理由づけをどう説明していくか。

◆「農都交流」に対する評価

（人）

とても良いことなので積極的に進めるべきだ	5	あまり良いとは思えない	0
良いことなのでそういう機会が増えるとよい	1	まったく良いとは思えない	0
わからない・何ともいえない	2		

□肯定理由：積極的に進めるべき/機会が増えるとよい

地方の活性化。このままだと地方の生活は早晩破綻するため。
農業の大変さをわかってもらえる良い機会だと思う。また、大田原の農産物のピーアールにもなる。
ワークショップ時、「ここはきっと星空が綺麗だと思うから、星を見たり、蛍を見たりしたい」という意見が出た。須賀川に住んでいると、それはとても当たり前の事なので、わざわざそれを目当てに来るという事が現実として実感出来る事ではない。都市部の方の意見を聞いて、気付かされ、活かしていく事は大切だと思う。
多くの方に大田原市に来ていただき、口コミ等でまた来たいと思い再来してもらう方、さらに、その知り合いなどにつながったりすることで来訪者が増えると思う。
とにかく地域が元気になる。企業と地域の課題と強みはお互いによりよい親和性を持っているはずなので、お互いの良さを感じながら WIN-WIN の関係になれると考えるから。

◆「農都交流」の良い点、悪い点（改善点）

良い点	・都市から疲弊する地方への資金移動。所得の増加。 ・農業、農家の生活を知ってもらえたり、異業種の方々と知りあったりできてとても勉強になる。 ・地元からは体験してもらい、都会の人の意見を聞くことが出来る。 ・都市部の人達の心の癒やしになると思う。地元の人達は交流する事により視野が広がり、意識の改革につながると思う。 ・もしかすると、都市部の企業が大田原市に目を向けてくれ、新たな活動の場に選んでいただき、市の発展が望める。 ・地域が元気になる。 ・新しい発想が生まれてくる。
悪い点／改善点	・ボランティアの面が多く、経済的には厳しい。農産物の販路が広がる様になると、もっと良くなると思う。 ・12 時過ぎの就寝は遅い。 ・おもてなしをする側の負担 ・都市部の人たちのリピート率、もしくは定住して頂ける確率など、大田原にどれだけの魅力があるのかは疑問。 ・もしかすると地元民との意見の対立が生じる可能性がある。 ・規模感や頻度によっては、地域が疲れてしまわないか心配。

（参考）

1．外国人旅行者の受入に対する考え

（人）

とても良いことなので積極的に進めるべきだ	4	不安があるのであまり受け入れたくない	0
良いことなので訪れる外国人が増えると良い	3	外国人を受け入れる必要はない	0
わからない・何ともいえない　1人			

□肯定理由：積極的に進めるべき/外国人が増えるとよい

・多くの“外部”を受け入れることで、頭の固い農村側の意識が変わる可能性があるため。

・外国の中学生、高校生の受入れが良いと思う。学校や国の事業などしっかりした身元保証のある方々なら、積極的に進めるべき。また、買い物など高額な商品を買っていく人もいるので、経済効果につながる。

・私自身は孫の未来のためにやるべきと考える。外国人との生の触れ合いや言葉（英語）、生活の違いなど、孫が何でも興味を持ってくれる事。心配な事は料理のレパートリーが少ないこと。

・外国人を受け入れる事により、国の特長や文化の違いを学ぶ事が出来て、受け入れ体制の充実を図ることができると思う。今後、仮に外国人労働者など、増える事があるとすれば、体制が整っている事は大田原の強みになると思う。

・人類みな兄弟。大田原に来たいと思えば来てほしい。ただし、言葉の壁や文化の問題で、十分な受け入れは難しい。また、外国人のイメージで良く思わない部分がある。

・言語問題

・旅行者が地域の人達に迷惑をかけないか（マナー面や文化的な部分で）。多くの交流を行うことで新しい価値観が生まれ、地域にも良い刺激になると考える。

③静岡県掛川市での実施

1）モニターツアーの実施

（実施日時）　平成２７年２月５日（木）～６日（金）　２日間

（参加者）　男性８人　女性２人　（計１０人）

性・年代	居住地	職業
①　女性	神奈川県横浜市	企業 旅行業（代表取締役）
②　男性	岩手県滝沢市	大学（准教授）
③　女性	大阪府大阪市	NPO（ﾁｰﾌﾌﾟﾗﾝﾅｰ）
④　男性	滋賀県甲賀市	地域活性化活動団体
⑤　男性	滋賀県甲賀市	地域活性化活動団体
⑥　男性	東京都千代田区	企業 商社（執行役員）
⑦　男性	東京都港区	企業 サービス業（ﾏﾈｰｼﾞｬｰ）
⑧　男性	大阪府吹田市	企業 サービス業（ﾏﾈｰｼﾞｬｰ）
⑨　男性	東京都中央区	企業　人材派遣（代表取締役）
⑩　女性	東京都中央区	企業　人材派遣

（日程）

２月５日 （１日目）	・移動（集合） ・オリエンテーション ・抹茶のおもてなし体験 ・見学 ・視察 ・振り返り ・交流会
２月６日 （２日目）	・朝食 ・農作業体験 ・施設見学 ・意見交換 ・解散

2)モニターツアーの行程

第１日目（２月５日(木)）

◆集合（12：30）　JR 掛川駅南口集合

◆オリエンテーション（13：00～）

掛川城二の丸茶室に移動し、石川智康氏より農都交流プロジェクトについてのミニセミナーを実施。その後モニターツアーの行程を紹介した。

◆抹茶のおもてなし体験（14：00～）

二の丸茶室にて本格的な抹茶体験。

◆日坂宿（散策）（15：00～）

旧東海道の 25 番目の宿場町として栄えた日坂宿を散策する。有形無形文化財に指定され当時の宿場文化を今に伝える川坂屋等を見学。

◆東山地区視察視察（15：50～）

世界農業遺産に指定されている掛川市東山地区の茶畑を見学。また粟ヶ岳中腹にある掛川のシンボル「茶文字」も楽しむ。

◆講演（17：00～18：00）

宿泊場所である「ヤマハリゾートつま恋」に移動。掛川市の世界農業遺産への取組について話を聞く。

「『世界農業遺産』の取組について」

掛川市環境経済部お茶振興課 永谷専門官

◆振り返り（18：00～18：20）

◆夕食兼交流会（19：00～21：00）

地域関係者・茶農家のみなさんも参加して意見交換と交流会を行う。

第２日目（２月６日(金)）

◆出発(8：30)

◆農作業体験（9：00）

東山地区の「世界農業遺産」茶草場での農作業体験。

◆昼食（11：30～13：00）

茶農家の方が作ってくれたおにぎり弁当体験。さらに煎茶のおもてなし体験も行った。

◆大日本報徳社見学（13：30～14：00）

◆意見交換（14：00～15：00）

二宮尊徳にゆかりのある、国の重要文化財に指定されている「大日本報徳社」を見学。さらに施設を借りて、今回のモニターツアーに関する意見交換会を行った。

◆解散（15：15）

3）モニターツアー参加者アンケート結果

ｉ．モニターツアー参加者（企業、大学等関係者）

◆参加者属性　（計10人）

	業種・分野等	人数
1	農業生産法人まるごとファーム（株）	８人
2	農業生産法人	１人
3	大学	１人

◆農山漁村体験ツアーの評価　（人）

● とても楽しく満足した　2	● あまり楽しくなかった　1
● まあ楽しかった　6	● まったく楽しくなかった　0

※無回答1人

□理由「とても楽しく満足」

・農都交流のモニターツアーは社内研修にない面白さがあった。大日本報徳社の意見交換会の場では、立場の違いから視点も様々で気づくことが色々とあった。都市型企業でも人材不足は深刻で、新しい企画を打ち出したとしても、すぐに通用しなくなり、考え方ややり方を進化させ続けなければ効果は、到底見込めない。価値観を変え、何を重要視すべきかの軸をシフトしていく、まさに今が転換期なのかなと思う。今回、この企画に参加できて感謝する。
・石川様のお話はこの世界でのプロとして経験が長いこと、そしてそこに未来をお感じになって活動なさっている点が分かったこと。そして、温かい地元の方々とこんなに短期間で仲良くなれたこと、茶草場について実際に汗を流して体験できたこと。そして景色のいい場所で食べたお弁当は最高であった。

□理由「まあ満足」

・①プログラムの数が多すぎる。（抹茶、報徳社）は個人的には必要なのかどうかと感じた。また、地元学についても、コンセプトとしては良いとは思うが、観光をしている印象が残った。②やはり農家に泊まるという体験が必須ではないか？農都交流プロジェクトの成否の鍵だと思う。
・今回のツアーで参加された企業の内容をみていると様々であった。農家自身が参加しているのは弊社のみだったので、今後、農都交流が盛んに行われていくだろうと感じた。農家側の方が盛り上がりに欠けるように感じたが、非常に有意義なツアーだと感じる。そのほか、安全管理が一番の課題点だと感じた。どのような部分に注意を払わないといけないのかを十分に理解してもらう工夫が必要だと思う。農都交流全体を通じて、弊社でも取り組んでいきたいと感じる。
・全体的には非常に満足のいくツアーであったが、もっと地元の方々との交流の時間が必要。体験ではなく、作業と説明があったので、もっと実技を増やし、内容を濃くしたツアーを望む。
・一つひとつのプログラムは非常に内容の濃いもので、高い満足感が得られた。「とても満足した」に達しなかった理由は、参加者が感じたこと、得たことを互いに発言し合って、情報や意識を共有する機会が少なかった点にある。解散間際の報徳社での車座ディスカッションで、なかなか議論が収束しなかったのも、おそらくみんなが「まだまだ話し足りない」と感じていたからに違いないと思う。
・2 日間で掛川の魅力を知り、農都交流のあり方について知ることができた。プログラムの組み方はいろいろあると思うが、私にとっては座学で概要やポイントを学んだあと、体験する、という今回のような流れが、理解しやすくてよい。研修相手によってバリエ

ーションが必要ということか。ただ、座学の時間はそれぞれもう少し短めだと皆さん集中してきかれるのではないかと思う。最後の意見交換は、できればもう少しじっくりいろいろな方の意見を聞きたかった。
・普段お会いする事のない方々と、様々な視点からお話することができ、とても収穫の多いものとなった。「世界農業遺産」の農業体験をメインと考えていたため、更に農作業を行う時間が多ければ良かったと感じた。石川様がセミナーでお話しされていたような『民泊』が増えれば、更に魅力が増すように思う。

□理由「あまり楽しくなかった」

・企画が多すぎて焦点がぼやけてしまった感がある。GIAHS でアピールするならば完全にお茶に関係する地元との方との交流時間を増やす方が、企業が下見に来た時には良い判断材料を与えることができると思う。また、参加者については特に研修関係に従事する企業関係の方が少なく、モニタリングとしては不十分。

◆「農都交流」（農山漁村での企業や学校等との交流活動・体験活動）に対する評価

（人）

とても良いことなので積極的に進めるべきだ	7	あまり良いとは思えない	0
良いことなのでそういう機会が増えるとよい	3	まったく良いとは思えない	0

□理由

・参加者・皆さんが農業体験をしている時の顔色が違っていた。自然の中で食べ物を育むという行為は、何か都会人には琴線にふれる行動であるに思う。
・非常に有意義な時間であったと感じる。もう少し掛川で過ごしてみたいと思った。また、私は日常的に農業に携わっているので、少し飽きが出てくる部分もあるが、実際に多くの参加者が笑顔で作業を行う姿を見て、私自身も農作業に対し、大変面白いという感情になった。あまり外部と交流することがない農業において、外部の方が来て農作業に取り組むことで農家側も心境が変化することが分かった。正直に楽しかったと感じた。
・モノが溢れている時代では、不便さを感じる機会が非常に少なく、本質が見えにくくなっている。効率性を追求し続けると、大切なものが見えづらくなる。それらを気づくには、都市部の企業・団体が、農山漁村に出向き、地域の人たちと交流を持つことが一つの策になると思う。地方に行けば、インターネット検索で見つけられないものが発見できるので、企業は感性を磨く機会を社員に与えていかなければならないと思料。よって、地域の人たちの交流は、継続し続けていくべき取組みと考える。
・普段生活している内で見えない世界を直接体験でき、貴重な体験であった。今後は、定期的に企業としてこのような体験をできるツアーを考えたい。
・地域活性化、人口減少、限界集落等の問題がすぐそこに現実として見えてきている中、このような取組み必ず進めるべき。
・農山漁村が直面している問題の解決は、農山漁村自身でも、行政や研究機関が関わっても容易でなく、企業等の人的リソースが強く求められていると思うから。また、企業等にとって農山漁村は前途有望なマーケットであり、そこで獲得したノウハウはさまざまなフィールドで応用可能な知的財産になるとも思うから。
・石川氏が言われたように、農山漁村地域と都市部双方の課題解決の手段の一つだと思う。特に農山漁村地域の価値を見直し、評価が高まることにつながると思う。都市部の人間は、毎日の生活が農山漁村地域に支えられていることを忘れがち。
・会社から外に出て研修を実施する最大のメリットは「非日常の環境に身を置くこと」である。都会のど真ん中にある弊社にとって農山漁村は非日常の極み。
・個人的には積極推進派。利用者側が選択する権利やニーズがあってしかるべき。こういった機会を創造する側も競争原理があってこそより良いものが創れると考えている。

・普段触れ合うことの少ない世代や地域や職業の方と触れ合うことで、新しい価値観との出会いや自分自身の気づきにつながると思う。達成感を感じることができ、また、コミュニケーション能力の向上も図れることから、企業等の研修にも有効であると感じた。

◆「農都交流」活動の実施状況　（人）

	組織全体で取り組んでいる	支社や部署で取り組んでいる	農山漁村では行っていない	わからない・知らない
ア　自然保全・学習や文化継承などのCSR活動	2	4	1	3
イ　農作業やお祭り支援などのボランティア活動	4	3	1	1
ウ　新入社員や部門別、職種別等の研修・教育	2	4	2	2
エ　産品や環境等を活用する製品や事業の開発	4	2	4	4
オ　味覚狩り、収穫体験等のレジャー（福利厚生）	3	0	3	3
カ　社員（職員）向けの農園としての借り上げ	3	0	3	3
キ　退職者向けの移住や定住の情報提供	4	0	4	4
ク　外国人社員（職員）向けの研修プログラム	3	0	3	3

5.「農都交流」活動の今後の実施意向（複数回答）　（人）

ア　自然保全・学習や文化継承などのCSR活動	6
イ　農作業やお祭り支援などのボランティア活動	8
ウ　新入社員や部門別、職種別等の研修・教育	5
エ　産品や環境等を活用する製品や事業の開発	7
オ　味覚狩り、収穫体験等のレジャー（福利厚生）	5
カ　社員（職員）向けの農園としての借り上げ	4
キ　退職者向けの移住や定住の情報提供	2
ク　外国人社員（職員）向けの研修プログラム	4
その他	6

◆.「農都交流」を進める上での問題・課題（複数回答）　（人）

農山漁村との交流の意義や目的が分からない	1
農山漁村との交流による企業メリットが分からない	4
現在の研修活動等に問題がなく成果も評価できる	0
農山漁村で行う（できる）プログラムが分からない	3
農村漁村での効果や期待する成果が分からない	7
交流相手となる農山漁村の存在が分からない	4
交流のためのコスト（運賃など）が問題になる	7
交流のための時間や労力がかかることが問題になる	7
支社や部署ごとならば可能だが全社では難しい	1
その他	4

◆「農都交流」を進める上で必要な情報（複数回答）　（人）

大学や企業の受入を希望する農山漁村の情報	6
企業等に提供できるプログラム等のソフト情報	7
受け入れる農山漁村への具体的なアプローチ方法	3
農都交流の成功事例や効果に関する情報	7
農都交流に関して助言がもらえる相談相手の情報	7

8.「農都交流」に地する意見、推進するためのアイデア

・私は、企業と農業法人の両面を持っているが、今回は受け入れる側での立場で参加させて頂いた。一番印象に残った場面は、やはり農業体験プログラム。正直、あれ程参加者の皆さんが生き生きと積極的に農作業に関わるとは思ってもみなかった。受け入れ側としては予想外の行動と映った。 ・私も日々は都会暮らし、週末百姓として生活しているので、あまりストレスが溜まらないのかもしれないが、「農都交流」は確実にニーズがあると確信。今後「まるごとファーム」としては、積極的に受け入れる側の立場として関わっていきたい。様々な情報、セミナー等がほしい。
・今回は、生産者側・参加企業側のそれぞれの立場から参加できたのが新鮮であった。課題としては、安全管理に対する問題が大きいと感じた。生産者としては当たり前だと感じて操作している機械でも、初めての参加者にとってはどのような危険性を孕んでいるのかはわからないので、その危険性に対するギャップを予め埋めることが重要だと感じる。 ・また、農都交流を推進するにあたって、法整備等の面を緩和していくことが必要不可欠な課題であると思う。法律・政策でしたくてもできない地域もあるので、コミュニティの団結と共に行政による協力も必要だと感じた。
・農都交流を推進するために、都市型企業の費用面を国が優遇する。研修プログラムの中に、一日は農作業を入れ、実労働を経験してもらい、共同作業の達成感を得ていただく。

・もっと交流の場を!!座学が多く、体験メニューの時間が少なすぎる。事前、予習の課題を出し、ツアーの意義、交流の問題を把握させ、地元の方々との交流時間の増加に使ってほしい。
・農業（茶草場農法）の一連の流れを知りたい。農家→加工工場→販売の流れを見たかった。各現場のプロのこだわりを勉強したかった。

（1 ） 概要
・お茶園ならではの作業やそこでしか得られないプログラム（例えば、お茶の葉やつぼみの天ぷら、お茶の飲み比べなど）を世界農業遺産に認定された地域であることを中心に訴えた方が企業研修企画者にとって興味を惹くのではないか。
・お茶の GIAHS のアピールの仕方が有機／無農薬農業と思わせる表現になっており、あくまでも生物多様性に益するとの表現のみで充分。（掛川でやる意味の重要性はこれで理解できる。）
・事業の立ち上げ及び継続性についてはかなり地元での必要項目の対策＝検討が上げられる。特に宿泊施設については新たな箱ものをつくるのではなく、地域にあるものを如何に活用できるか検討する必要。
1)交流する観点
1.民泊があれば夜の懇親（お酒）も含めてご地元と本当の交流ができると思う。ただ、今回は民泊の想定ではない為、夜の会合（懇親会）はご地元からの参加者や会場も含めて難しいと感じる。そうすると真の交流は難しいのかもしれない。
2.日中の農作業上でのご地元からの指導は自然とお互いの会話や交流が育まれると思う。
2）事業性の観点
1.宿泊はつま恋リゾートを想定しているが、地元の農家が受け取る収益の差はかなり出来てくるのではと案ずる。結局つま恋リゾートの為の「農都交流」となってしまい、地元農家にとっての収益はつま恋リゾートに比べてかなり劣ると見込まれ、最終的に興味を失っていくのではと危惧する。
2.上記解決するための利益配分、若しくは農家民泊についてご地元の意向を検討。また懇親会等も地区内の東山いっぷく処やどこか空いている施設や宿場跡の古民家でやる等、地域一体となった施策が必要。
3）プログラムの観点
1.農作業はどんな種類でも構わないが、どのように参加者の安全性を担保できるかを検討・準備。
2.農作業は参加者の為の作業ではなく、実際上農家の人たちにとって有益な作業を考案・準備。
3.参加者にとってやりがいがあると思わせるプログラムを考案、今回はやるべき仕事が全て完結したので感慨もあった。
4.掛川の環境を活かしたプログラムも入れてはどうか。例えば青空を見ると何機も飛行機が飛んでいるのは初めての経験であった、地元農家の方々によると夜の星空も良く見えるとの事、いい素材と考える。偶然にもカモシカのつがいや、さしばの飛行など見られたが、地域の動植物の観察等も可能性があるのではないか。

・大学でも学生を農山漁村に連れて行って、地域の課題を発見させ、解決のための提案をさせるといった趣旨の授業がいくつかあって、4 月から始まる新学期に私も担当する予定。毎回が試行錯誤で、ともすればオリンピックではありませんが、このような地域との交流授業は「すること自体に意義がある」あるいは、「お互いを知ることができて有意義だった」というだけの結論に終わってしまいがち。受け入れてくださる農山漁村のみなさんの善意と犠牲の上で成り立っていたという側面が強くなる。 ・参加する側にとって「体験」ではなく「貢献」となるためには何が必要なのか、交流プログラムを企画する上で、受け入れ側の人々と十分にコミュニケーションをとる必要を感じた。と同時に、地域の行政職員、支援機関等の職員との連携も不可欠。地域内外の人々が問題意識を共有するためにも、企業・大学の人材、農山漁村の人々に加えて、こうした人々も交えてプログラムを継続させていくことが重要なのではないかと感じた。 ・今後の展望としては、問題の所在が明らかになっていく過程で、それを解決できるリソースを持っている企業・大学の参加を積極的に募って、解決のための提案を求めたり、実際に事業の一環として解決してもらったりしながら発展していくことを期待。
・都市生活者は、自分たちの生活が食の面でも環境面でも、農山漁村をはじめとする都市以外の地域に支えられていることをもっと理解する必要があると思う。 ・企業や大学を対象とした農都交流をはじめ、さまざまな対象に向けてのさまざまな内容のプログラムが普及して、都市と農山漁村のつながりがたくさん生まれることを期待。

ⅱ．ツアー受入関係者

◆モニターツアーの受入参加者のうちアンケート回答者 （計4人）

【今回のモニターツアーへの協力・関与状況】

分野	人数	職業・所属	協力・関与内容
自治体	3人	静岡県掛川市・地方公務員	交流会に参加
		掛川市役所	世界農業遺産「静岡の茶草場農法」の講演。
		掛川市役所 商工観光課	行程等事前打ち合わせ、観光パンフレットの配布
農業	1人	東山いっぷく処、農業	農作業の指導、食事の提供（弁当）、交流会への参加
計	4人		

◆モニターツアーで他地域の人を受け入れた感想

◇事前準備について

・大変だった　1人
・たいしたことはなかった　2人
・何とも言えない　1人
・特に事前準備はしていない　0人
・無回答　0人

◇実際の受け入れ時（作業の指導、食事提供等）について

・大変だった　1人
・たいしたことはなかった　2人
・何とも言えない　0人
・特に事前準備はしていない　1人
・無回答　0人

◇交流会について

・とても楽しかった　3人
・まあ楽しかった　0人
・何とも言えない　1人
・無回答　0人
・あまり楽しくなかった　0人
・全く楽しくなかった　0人

2．　今後の受入活動への参加意向

- ぜひ参加したい　2人
- 参加してもよい　1人
- 何とも言えない　1人
- あまり参加したくはない　0人
- 絶対に参加したくない　0人

◆モニターツアーの受入で印象に残っていること、良かったこと

自治体	・交流会で、全国の方から GIAHS や東山について思っている内容を聞くことができた。 ・東山の農家とモニター参加者との間で、今後も接点が期待できる。
自治体	ツアー参加者から茶草場農法に関する質問が多く、茶草場農法に対する興味・関心が高いと感じた。交流会は和気藹々とした楽しい雰囲気で、交流が深められ良かった。
自治体	農業生産法人、企業の人事担当者、環境専門家等々、各方面の方々のご意見を伺うことができ、大変参考になった。
農業	農作業ということで天気が良かったので安心であった。草刈り機やカッターを使った作業であったが、真剣に取り組んでいただき、ケガをする人もなかったので良かったと思う。

◆「農都交流」（都会の企業・大学等との交流・連携）を進める上での問題・課題

自治体	積極的な農家の参加。東山では、いつも同じメンバーが対応する形になっている。他の農家等を巻き込めなければ、今後の発展は難しい。
自治体	都会の方は、世界農業遺産や茶草場農法を知らない方がほとんどと思われるので、ツアー企画の段階でいかに伝えるかが重要。
自治体	反省会の中にも出ていたが、こちらで良いと思っていることと、先方様が求めていることが必ずしも一致していないと思うので、調整が必要。
農業	世界農業遺産を知っていただき、茶草場農法を継続していくため手伝いだけでなく、生物多様性を守る事の理解をしていただく。企業の研修では、自然の中での心の癒やしだけでなく、机上での仕事では得る事ができない自然、土地、気候と向き合う農業を知ってもらう。

◆「農都交流」に対する評価

とても良いことなので積極的に進めるべきだ　3人	あまり良いとは思えない　0人
良いことなのでそういう機会が増えるとよい　1人	まったく良いとは思えない　0人
わからない・何ともいえない　0人	

□肯定理由：積極的に進めるべき/機会が増えるとよい

・来訪者が求めるモニターツアー参加ポイントについて、東山の農家が直接聞くことができる。
・相手方も、東山の地域財産の活用方法を考えながら、参加していただいているので、今後の展開について話がしやすい。
・農都交流は有意義なことであると考えるが、現状は少ないと思われる。農都交流の機会を増やすような企画を積極的に進めるべきである。
・掛川市は田園都市であり、お茶や果物などの産地であり、また、さっぱりし過ぎていない人情もあると思う。当市で農業に深く関わる人達と交流し、農業や人のことをよく知っていただき、お互いに理解を深め、繋がっていけるいい機会であると考えるので。
・外で遊び、汗を流し、大声で笑い、助け合う、親父と酒を飲み、母さんの作る弁当を食う、自然の中で学ぶ事はたくさんあると思う。そして、ツーリズムのあり方を外からの目線で提案していただけたらうれしい。

◆「農都交流」の良い点、悪い点（改善点）

良い点	・農作業の大変さ、苦労等を実際に体験しなければ、他者へ広告できないと考える参加者が多く、お茶ができるまでの作業を丁寧に伝えていただけると感じた。 ・都市部の方には里山の自然や文化を知って楽しんでいただき、農村は交流によって活性化する。 ・掛川ならではの産業、文化、お人柄等の理解を深めていただける。
悪い点	・東山から提案できる体験メニューの不足。 ・時期的な原因が多く、今回以外のメニューを提案することは難しい。 ・来ていただいた方に満足していただけるよう、農村側の受け入れ体制を作っていく必要がある。 ・短期間だと見えない部分もある。 ・茶業最盛期の受け入れが難しい。地元の人たちにもう少し理解してもらう必要がある。

（参考）外国人旅行者の受入に対する考え

とても良いことなので積極的に進めるべきだ……１人 良いことなので訪れる外国人が増えると良い……２人	不安があるのであまり受け入れたくない……0人 外国人を受け入れる必要はない……0人
わからない・何ともいえない……1人	

□肯定理由：積極的に進めるべき/外国人が増えるとよい

農村地域の活性化に繋がるので良い。（心配なこと）通訳等がいないと対応しにくいと思われる。基本的には、積極的に受け入れていこうとする方向は良いと思う。できるかぎりのおもてなし、毅然として対応するべき点と、ノウハウは必要である。

□「わからない・何ともいえない」と回答した理由

・来訪者が増えることは喜ばしいが、東山地区に限っては、日本人を受け入れる体制もままならないなかで、外国人を受け入れるのは大変厳しい。
・過去、外国人の受入れにあっては、地域説明等を英語で代行させてもらったが、これを続けると地元がひとり立ちできない。
・農村地域の活性化に繋がるので良い。心配なことは通訳等がいないと対応しにくい点。

4. 平成 26 年度事業結果の分析及びまとめ

（1）今年度実施業務から見た大学・企業等との連携の進め方と課題

◆今年度の取組

事業	目的・ねらい	開催地・開催時期	備考
普及啓発セミナー	①農山漁村と大学・企業等との連携・交流に関する関心や理解の向上 ②農山漁村と大学・企業等との連携・交流の取組の動きの創出と活発化 ③セミナー参加者間の出会い・マッチン グの機会の提供	第 1 回　大阪 （平成 26 年 7 月 17 日）	・大阪では初めてのセミナー開催
		第 2 回　東京 （平成 26 年 7 月 24 日）	
		第 3 回　東京 （平成 27 年 3 月 12 日）	・平成 26 年度の事業の成果を紹介
先進地域における研修会	①受入先進地域のプログラムや取組体制等の視察と体験 ②受入先進地との意見交換による問題意識や方策等の情報共有	①山形県飯豊町 （平成 26 年 11 月 6～7 日）	
		②岩手県遠野市 （平成 26 年 12 月 4～5 日）	
		③大分県宇佐市安心院町 （平成 27 年 2 月 19 日）	・1 日開催に変更
プログラム開発とモニターツアーによる検証	①大学・企業の研修等の受入意欲の高い地域でのプログラム開発 ②開発したプログラムのモニタリング（実施・検証） ③モニターツアーを通じての、企業・大学等への地域のアピール	①島根県雲南市 （平成 26 年 11 月 13～15 日）	
		②栃木県大田原市 （平成 27 年 1 月 22～23 日）	
		③静岡県掛川市 （平成 27 年 2 月 5～6 日）	・世界農業遺産の活用

農山漁村と大学・企業等の研修等による連携については、昨年度からの農水省の本格的な取組や、企業の農山漁村をフィールドにしたＣＳＲ活動の広がりなどによって、理解は深まっている。特に農山漁村と大学・企業等が継続的に連携・交流することについては、農山漁村の自然や景観、農地等の保全や、地域活性化につながる点で、社会的に意義のある活動だと評価されている。

【農山漁村と企業等の交流・連携活動について】

	積極的に交流を進めるべきだ	機会や地域があれば進めればよい	あまり進める必要はない	無回答
大阪	9人	2人	1人	—
東京	18人	5人	2人	1人
合計	27人	7人	3人	1人

※平成 26 年度セミナーにおける企業・第核関係者へのアンケート調査より

◆各種アンケート結果に見る企業・大学等及び地域の動向

セミナーや研修会、モニターツアー等において行った参加者や受入地域の関係者に対するアンケート結果から、都市部企業等と農山漁村との交流に関して、以下のような考え方や動向が読み取れた。

（企業・大学等の動向）

・企業と農山漁村地域との交流に関して、「積極的に推進すべきだ」と答えた関係者は７割を超え、その社会的意義や必要性への理解は高い水準にある。

・今後取組みたい交流活動として、昨年同様に「ＣＳＲ活動」「研修等」をあげる人は多いが、今年は「商品開発や商品企画での連携」とする回答が多く、企業側からはビジネスの場としての農山漁村、あるいはビジネスに活用できる資源等に注目していることが読み取れる。

・これは例えば、人材開発や研修サービス等の企業が農山漁村での研修を商品化しようとする動きであったり、農水産品のブランド化や自社製品等への活用を目指す動きなどである。

・こうした動向から、企業と農山漁村の交流・連携に関しては、ＣＳＲや研修、福利厚生等に加えて、「商品やサービス開発」においても可能性がある。すなわち企業に対するアプローチの可能性や連携テーマが増えたといえる。

（受入地域の動向）

・セミナーや研修会には自治体の関連部署（農政、観光、商工など）の職員が参加することが多いが、今年のアンケートでは「地域住民のやる気の喚起」「その気にさせる」といった受入意欲に関する悩みや課題があることを示す回答が目についた。

・セミナーやモニターツアーの受入に参加した地域関係者の間では、都市部企業との継続的な交流に向けた関係づくりの必要性への認識は高まっている。一方で、受入や交流が直接的な収入につながらない（謝金が安い）ことや、繁忙期などに時間を取られることへの不満や不安を危惧する声も一部に見られた。

・こうした動向を踏まえると、地域住民との合意形成や納得の獲得が重要になってきている。また住民の負担を軽減する体制づくりや、活動のメリットを感じられる仕組みなどを検討していく必要がある。（農水産品の販売など）

◆農山漁村と企業・大学の連携・交流を推進するための課題

今年度の各種事業及び参加者へのアンケート調査の結果から、双方の連携・交流を進めるためには、次のような課題に応えていく必要があることが見えてきた。

【企業・大学等の問題と主な推進課題】

①連携・交流は農山漁村を応援する点では有効だが、企業側へのメリットが実感できない。

・自社施設などで実施可能な研修活動を、農山漁村に出かけて行うことの説明が困難

・農山漁村での研修活動には、準備のための労力や交通費などのコストが必要となる。

その投資に見合う成果が具体的に測定、説明できるか疑問。

・農山漁村での研修に関して、コミュニケーション能力やチーム・ビルディングなどの期待効果が挙げられるが、具体的な数値や成功事例が見えない。

②CSRや商品開発、福利厚生など企業が感じている可能性に農山漁村が対応できていない。

・企業は農山漁村との交流に研修以外の可能性も感じているが、農山漁村側はグリーン・ツーリズムのメニューしか用意できていない（マッチングができない）

・モニターツアーなどではＪＴＢなどのコーディネーターがいるが、実際の交流に関しては、地域側の調整役がはっきりしないことが多く、企業側の負担が大きくなる

・ＮＰＯ法人などは特定のプログラムを押し付けたり、地域との連携をしたりできないなど、企業側が求めるニーズや要望に応えられないケースもある

①企業視点からみた農山漁村との連携・交流のメリットや効果の説明力の強化
②企業の多様な期待やニーズに応える「連携・交流スタイル（商品）」の開発
③企業が安心して連携・交流を進めるための、地域内コーディネーターの配置

【農山漁村地域の問題と推進課題】

①企業・大学等との連携・交流を担う組織や専任者が明確でなく、責任ある対応ができていない

・企業や大学のニーズや要望を体験プログラムに反映したり、受入役の地域住民に的確に説明したりするなど、コーディネートやマネジメントを担う組織が十分ではない。

・受入れに関する合意ができていても、従来のグリーン・ツーリズムの枠を超える受入活動や農繁期の受入れを嫌がる住民がいるなど、受け入れ能力が不安定。

②受入は観光関連事業者が中心となることが多く、広範囲な地域ネットワークが機能していない

・受入の中心が宿泊施設（農家民宿など）をはじめとする観光関連事業者となるケースが多く、農業体験も事業者の農地などで行うなど狭い範囲で完結しがちである。

・また宿泊施設などの観光関係者以外の住民（各種体験や交流活動への参加者等）には、謝金や物販などの仕組みが十分形成されておらず、参加協力の輪が十分に広がっていない可能性がある。

・また近隣の大学や他地域の観光・交流施設との連携を進める推進役が不在で、本来の資源や魅力を発揮できていない地域もある

①受入れや交流を中核的に担う組織や選任者等の確立
②地域や分野を超える広範囲な受入ネットワークの構築（＝体制の再構築）
③特定の住民だけでなく、地域全体で取組むことへの合意の形成
④経済効果など具体的なメリットの提示や負担を軽減する仕組みづくり

（2）大学・企業等との連携推進のための方策等の提言

前述の課題を踏まえて、大学・企業等を農山漁村に受け入れ、継続的な連携・交流関係を形成していくためには、以下のような取組が必要になると考えられる。

①交流・連携活動の推進と受入活動をマネジメントする中核組織の確立

◆交流人口の拡大に関する専門的な視点やビジネス発想を持った中核組織を設置する
◆グリーン・ツーリズムを先導してきた協議会等とも連携しつつ、地域の交流ビジネスを担う組織体
◆NPO、第 3 セクター、地域旅行会社など、将来の自立を前提とした組織体とする
◆第 3 種旅行業の資格を取得し、地域資源を活用した旅行企画や商品の開発・販売も可能になる
→事例としては以下のようなものがある。
・（株）大田原ツーリズムはグリーン・ツーリズムを推進するために設立された企業法人
・コミュニティバスの運行や交流人口の拡大等、地域の課題解決を広範囲な分野で担う地域型ＮＰＯ（総合型ＮＰＯ）　※新潟県長岡市などに事例がある

②企業・大学等のニーズや要望等に対応する「農山漁村交流プログラム商品」の開発

◆研修をはじめCSR活動や商品開発、職場旅行等、自分たちの地域で提供できる交流商品を開発
◆企業のニーズや関心に対応するセールス・シートとして活用し、需要を喚起
◆休耕田を活用した貸農園や食育イベントの支援など幅広いメニュー（商品）を開発
→企業・大学に限定せず、都市部のファミリー層や移住希望者向けのツアーなども検討

③地域や分野を越えた幅広い受入ネットワークを構築し、多様な交流を推進していく

◆企業研修分野では研修のコンサルティング会社、職場旅行や福利厚生活動では旅行会社、都市部のファミリー層のレジャーではバス会社など、多様な主体との連携で「受入力」を高める
◆地域の文化や自然環境保全、地元学などでは近隣の大学や地域文化に関するNPOや団体等（伝統文化や地域芸能等の保存や継承を行うNPOや団体等）と連携し、解説や本格的な体験を通じて魅力を高めていく
◆訪日外国人旅行者の受入をにらんで、通訳ボランティア団体や留学生との連携も視野に入れる

④自治体（県や市町村）との連携を強化し、企業と農山漁村を結ぶ新たな制度や仕組みを開発

◆和歌山県や長野県などで進めている「企業のふるさと」「森林の里親」制度のように、企業と農山漁村を結ぶ制度やしくみの制定を促し、企業へのアプローチを行いやすい環境を形成する
◆こうした制度は、連携・交流活動の公共性イメージを高めるとともに、自治体が応援する活動として企業が利用しやすい制度となることが期待できる
◆また県などが企業等に働きかけるという効果も期待できる。
→参考資料5の「交流事例集」を参照

なお、具体的にアプローチする企業・大学等やアプローチ方法については、以下のようなものが考えられる。

（ターゲット企業について（例））

①本社は他の都道府県だが地元地域と関係のある企業

・支社や工場、各種施設が立地、創業者や経営者が出身者、スポーツ部などが合宿　等

②本社が自道府県内にある地元企業

・県庁所在地など都市部で活動している中堅企業（地元金融機関やマスコミ各社等）

③ＣＳＲ活動やボランティア活動等に熱心な企業

・地元の青年会議所やロータリークラブに加入している企業

・地元周辺で環境保全や森林保護、食育活動などに取組んでいる企業

・地域や中央の経済団体等でＣＳＲ部門の委員会に所属している企業

→主要各社のＨＰでＣＳＲ活動への取組を確認することも有効

④ＣＳＲ活動に関するセミナーやイベント等に出席している企業

（アプローチ方法について（例））

①受入地域ごとに複数の受入メニュー及びプログラムを用意する（モデルや例として）

・「研修メニュー」「ＣＳＲメニュー」「職場旅行メニュー」「ミーティングメニュー」「レジャーメニュー」など、企業等のニーズを踏まえつつ地域が提供できる受入メニューを作成。具体的なモデルプログラムを用意して説明（セールス）活動を行う。

・メニューやプログラムを紹介するパンフレット等の説明ツールを作成。各種情報発信や誘致活動等に使用する。

②旅行代理店や研修サービス会社等へのコーディネート依頼

・研修や職場旅行など、企業のニーズや情報を持つ企業等に仲介役（マッチング）を依頼する

③観光協会やＮＰＯ等交流活動の推進組織による情報発信や誘致活動の展開

・交流をコーディネートしたり推進役を担う機関や組織に、マッチング部門を設けて、都市部の企業訪問や関連イベントへの出展などを行う。

④知事、市町村長によるトップセールス活動

・企業の経営陣と面談する機会の多い首長に、①の受入メニューについて説明し、機会があれば交流活動の誘致活動を行ってもらう。　　等

・